

はしがき

■ 編集の趣旨

巻間をにぎわした、改訂「学習指導要領」による新教科書で学ぶ高校生・受験生用として、期待される**発展学習**に広げるべく、小社では新しい「**発展30日完成シリーズ**」を企画し、順次刊行してまいります。

編集にあたっては、小社版簿物シリーズの長所はすべて採り入れ、良問の精選と、詳しく誰にもわかる解答を心がけました。

本書は、このシリーズの一冊として、姉妹編古文〔高校初級用〕〔高校中級用〕の後を受け、多様な入試問題に対応できる古文読解力を養うことを目指して作成しました。高校三年生を主な対象としましたが、理解度に応じて柔軟に使用することが可能です。

■ 本書の特長

- 1 書名にあるとおり、三十日間、毎日一題ずつ丁寧に問題を解いていくことで、私大入試・国公立二次試験に耐えられる読解力が養えるよう工夫してあります。
- 2 演習用の三十問題は、二〇〇一年以降の大学入試問題を精査して、次のような観点から選びました。
 - ① 二〇〇一年以降の出題回数総計が上位四〇位以内の作品。
(ただし、近世に限り作者の出題回数。)
 - ② 文学史上重要なので、内容の一端を理解しておきたい作品。

編者

③ 高校教科書にも採録されることが比較的多い作品。

以上の観点から選り出した候補問題を、さらに時代やジャンルのバランスを考慮して最終的に三十問にしぼり、史的な流れが把握できるような**ほぼ成立年代順**に配列しました。

- 3 右ページ下段に、コラム「**文学史チェック**」を二十二項目加えました。文学史の基本事項・豆知識をコンパクトにまとめてありますから、知識の整理に活用してください。
 - 4 なお、語注は、元の入試問題に付してあったものをそのまま用いていますので、実戦感覚で利用できます。
 - 5 「別冊解答書」には、自学自習でも十分理解が行き届くよう、「解答」のほかに、具体的な解法を示した詳しい「解説」と問題文すべての「品詞分解」「口語訳」をつけました。
- 特に「解説」には、問題を解く上での「重要知識」に言及しているところがありますので、ぜひ熟読してください。

本書によって、諸君に古文の読解力が確実に身に付くことを期待しています。

目次

第1日	伊勢物語	〔中古・10世紀中期〕	4
第2日	大和物語	〔中古・10世紀中期〕	6
第3日	上佐日記	〔中古・10世紀中期〕	8
第4日	蜻蛉日記	〔中古・10世紀後期〕	10
第5日	落窪物語	〔中古・10世紀後期〕	12
第6日	源氏物語	〔中古・11世紀初期〕	14
第7日	枕草子	〔中古・11世紀初期〕	16
第8日	更級日記	〔中古・11世紀中期〕	18
第9日	狭衣物語	〔中古・11世紀後期〕	20
第10日	堤中納言物語	〔中古・11世紀後期〕	22
第11日	栄花物語	〔中古・11世紀後期〕	24
第12日	大鏡	〔中古・11世紀後期〕	26
第13日	讃岐典侍日記	〔中古・12世紀初期〕	28
第14日	俊頼髓脳	〔中古・12世紀初期〕	30
第15日	今昔物語集	〔中古・12世紀初期〕	32
第16日	無名草子	〔中世・13世紀初期〕	34
第17日	無名抄	〔中世・13世紀初期〕	36
第18日	方丈記	〔中世・13世紀初期〕	38
第19日	宇治拾遺物語	〔中世・13世紀初期〕	40
第20日	平家物語	〔中世・13世紀中期〕	42
第21日	建礼門院右京大夫集	〔中世・13世紀中期〕	44
第22日	十訓抄	〔中世・13世紀中期〕	46
第23日	古今著聞集	〔中世・13世紀中期〕	48
第24日	沙石集	〔中世・13世紀後期〕	50
第25日	徒然草	〔中世・14世紀中期〕	52
第26日	増鏡	〔中世・14世紀中期〕	54
第27日	西鶴織留	〔近世・17世紀後期〕	56
第28日	笈の小文	〔近世・17世紀後期〕	58
第29日	古寺の秋	〔近世・18世紀後期〕	60
第30日	玉勝間	〔近世・19世紀初期〕	62

月 日 曜日

むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。そのころ、六月の望ばかりなりければ、女、身に瘡一つ二ついできにけり。女いひおこせたる。「今は何の心もなし。身に瘡も一つ二ついでたり。時もいと暑し。すこし秋風吹き立ちなむ時、かならずあはむ」といへりけり。秋まつころほひに、ここかしこより、その人のもとへいなむずなりとて、口舌いできにけり。さりければ、女の兄、にはかに迎へに来たり。さればこの女、かえでの初紅葉をひろはせて、歌をよみて、書きつけておこせたり。

秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれと書きおきて、「かしこより人おこせば、これをやれ」とていぬ。さて、やがて、後つひに今日まで知らず。よくてやあらむ、あしくてやあらむ。いにし所も知らず。かの男は、天の逆手を打ちてなむ呪ひをるなる。むくつけきこと。人の呪ひごとは、負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらむ。「いまこそは見ぬ」とぞいふなる。

語注

天の逆手⇒人を呪う動作。



問一 傍線部Aの意味として最も適当なものを、次の中から選んで、番号で答えなさい。

- 1 男は岩木のように心が無いわけではないので、月日を経てつらいと思ったのだろうか、次第に自分をみじめに思うようになった。
- 2 女は岩木のように感じないわけではないので、男を気の毒に思ったのだろうか、次第に心を寄せるようになった。
- 3 男は岩木のように風流心が無いままにいるならば、女の心が気がかりと思ったのだろうか、次第に情趣を解するようになった。
- 4 女は岩木のように感じないでいるならば、男の心が心配だと思ったのだろうか、次第に男をほめるようになった。

問二 傍線部Bの意味として最も適当なものを、次の中から選んで、番号で答えなさい。

- 1 女はその男のもとに行こうとしているのだといって、兄と口喧嘩になってしまった。
- 2 男がその女のもとに行こうとしているという評判がたって、人々は口々に噂していた。
- 3 女はその男のもとに行こうとしているという噂が立って、問題になってしまった。
- 4 男がその女のもとに行こうとすると、口やかましく注意する者がでてきた。

問三 傍線部Cの意味として最も適当なものを、次の中から選んで、番号で答えなさい。

- 1 秋になっても、飽きることはないと言っておりましたのに、そういられなくて木の葉が古びて降りしきるように、古びて飽きてしまっただけのご縁でしたね。
- 2 秋になったらと心にかけて言い交わしながら、飽きてしまったわけでもないのに、木の葉が降り敷いて浅い江になるように、浅いご縁でしたね。
- 3 秋になったらとことばでは言いながら、ここにいられなくて、木の葉が降るようにお別れしなければならぬ浅いご縁でしたね。
- 4 秋になったらと言いながら、もう生きていられないので、木の葉が江に降るように私は死んでゆく縁だったのでね。

問四 傍線部D「これ」は何をさすのか、本文中の語句を用いて説明しなさい。

□

問五 傍線部Eとは誰のどのような気持ちを示しているのか、書きなさい。

□